

江戸時代の日本へ伝わったオランダ製壁地図

三好唯義

一 はじめに

筆者の勤務する神戸市立博物館では、一九九三年の夏から秋にかけて特別展『栄光のオランダ絵画と日本展』（主催：神戸市立博物館、たばこと塩の博物館、朝日新聞社）を開催した。オランダ側よりアムステルダム、ハーグ、国立公文書館をはじめとする十八箇所におよぶ美術館・博物館の出品協力を得たが、テーマの立案から資料の選択、出品交渉、輸送、展示、撤去、返却にいたるまで、いわば手作りの海外展であった。海外展といえば普通、大きな新聞社等の持込み企画というのが相場であるが、そのことは故なきにあらざである。一地方公共団体の博物館にとって、例えば現地と手紙のやり取り一つにしても、通信文の翻訳・返答・返答文の適切な翻訳など難事であるし、金銭面も相まった微妙な交渉事項であるならば、さらに大変であることは容易に理解していただけると思う。

幸い展覧会は神戸・東京会場（たばこと塩の博物館）とも無事に終了することができた。そのノウハウ、顛末を記すことは本書に向きだらう

し、興味深いと思われる。しかし、筆者は古地図資料を糧にしている全国でもごく珍しい学芸員であることから、ここではその展覧会を機会に偶然判明した、地図学の一事例を報告することをお許し願いたい。

二 江戸時代の長崎の地を絵にしたような地図屏風

奇妙な見出しを付けたが、南蛮美術コレクター池長孟の収集した「世界四大洲図・四十八国人物図屏風」（図1、以下神戸市博屏風と略）のことである。池長は他に有名な「四都図世界図屏風（重要文化財）」や「世界地図万国人物図屏風（南蛮文化館蔵）」、「世界地図屏風（南蛮船渡来図屏風と一対、現在所在不明）」も手に入れており、地図屏風に関しても大コレクターであった。残念ながら後二者は手放されたわけで、現在は神戸市立博物館に伝わっていない。残った二作品から判断すると、その選択基準は美術品としての価値・良否と想像される。この神戸市博屏風であるが、ヨーロッパ、アメリカ、アジア、アフリカの地域図とその周囲に合計四十八区画の人物図を配し、上に四季職耕図、韃靼人狩獵図・海戦図等々を描くという、わが国の地図作成史上において極めてユニ

クなものである。池長自身の解説によると「濃彩にして精密を極む。画者不明なるも長崎画人たるは明白なり。」と記す。

ヨーロッパ図の上にはオランダ船の海戦の様子が描かれる。アメリカ図の上(図Ⅳ)には象やサイなどの動物と木や花が描かれ、二人ずつ二組の人物が立っている。左側はヨーロッパとアメリカ(インディアン)を、右側はアフリカ(黒人)とアジア(トルコ旗を持つ人物)を象徴した擬人化像で、動植物と合わせて全世界を表現している。このように地図にあらゆる要素を絵画表現で付加して、いわば百科事典の役割を果たすのは十七世紀のオランダで作成される地図の特色である。ただ、これら人物の間に「日」「月」と「天女」が飛び交っていることが、この部分を一種不気味なものにしているが、これは後述する。いずれにしてもこの片隻はヨーロッパ的雰囲気を感じている。

一方、アフリカ図の上には右に王と左はいわゆる韃靼人狩獵図で、獲物の虎が追われている。また、アジアの上には右に四季職耕図と左には三皇(八卦を手にした伏羲、口に草をくわえた神農、黄帝)が描かれている。このように、この片隻は極めて中国的な趣に溢れている。

一方はヨーロッパ、一方は中国という、近世江戸時代の異国が渾然一体となっており、見出しのような飛躍した比喩を用いた理由である。

国名地名の類は、たとえば伊多里野(イタリヤ)伊須波牟野(イスパニヤ)安牟解禮以野(アンゲリヤ)と書くなど読み方を万葉仮名表記したものであるが、これほど大量の地名翻訳は十八世紀以降のことと考えられ、本屏風の作成時期もそれ以前ではない。

この屏風はこれまで、古地図研究史上においてそれほど注目されては

いなかった。それは一つにはわが国の地図発達史において江戸時代後期に属す新しいもので、調査研究対象の網にかかりにくかったということ、そしてもう一つはこの屏風自体よくわからないというのが本場のところだろう。地図としては新しく、それにゴテゴテと装飾物をくつつけている変なもの、というくらいに思われていたのではないか。よって従来はこの屏風中の地図はヨーロッパ製アトラスに含まれる各地域図を拡大模写したものの程度に考えられていた。筆者自身は以前より、寸法描写共にピッタリ一致する原図があるはずと信じていたところ、たまたま件の展覧会準備中、オランダより送付の売り立て目録に「ファルクアジア図(一六九五年頃、図Ⅱ)があり、地図自体ならびにそこにある絵画部分からこれに間違いのないとその後で問い合わせの「ファクシミリをオランダへ送った。展覧会のカタログ論文と『博物館だより』^⑤ではこのファルクアジア図周囲に装飾物があるなどとは思ってもよらず、屏風三扇を一単位として、その単独地図を基にそれに合わせて他の原本による人物図や海戦図を描いたもので、その配置バランスが絶妙である旨を述べた。つまり、四地域図を一双の屏風(二地域図を一隻の屏風)に縦横うまく納めるため、その周囲の絵を描き足したと考えたのだ。

しかし、私の論文に興味を持ったオランダのヨッペン氏が *DE OUDJ. LUM ORBIS* 誌の「ファルク壁地図(図Ⅲ)のことを教えてくれた。さっそく取り寄せると、人物図付きの四地域図と世界地図が合わさった壁地図セットが存在していたのだ(その文献ではアフリカ地域図は欠けていた)。これにより神戸市博屏風の原本がいつきに解明した。その屏風は奇妙でも何でもなく、逆にオランダ製壁地図をそのまま受け入れた西洋

地理学受容の好例であったのだ（同時に、この江戸時代の屏風を通じて、これまで知られていなかったオランダ製壁地図が一つ判明した）。

つまり神戸市博屏風の原本は、ファルクアアジア図とセットとなる各地域図に、ファルク壁地図の人物図区画や動植物群図のマジナル（縁飾り装飾物）を付けたものである。四枚のオランダ製壁地図が日本製六曲一双屏風になったわけで、上部装飾（擬人化像、動植物群）は四箇所同一になるところを一箇所だけにし、前述したようにあとの三場面を日本人絵師が西洋的・中国的雰囲気を描き分けているのである。

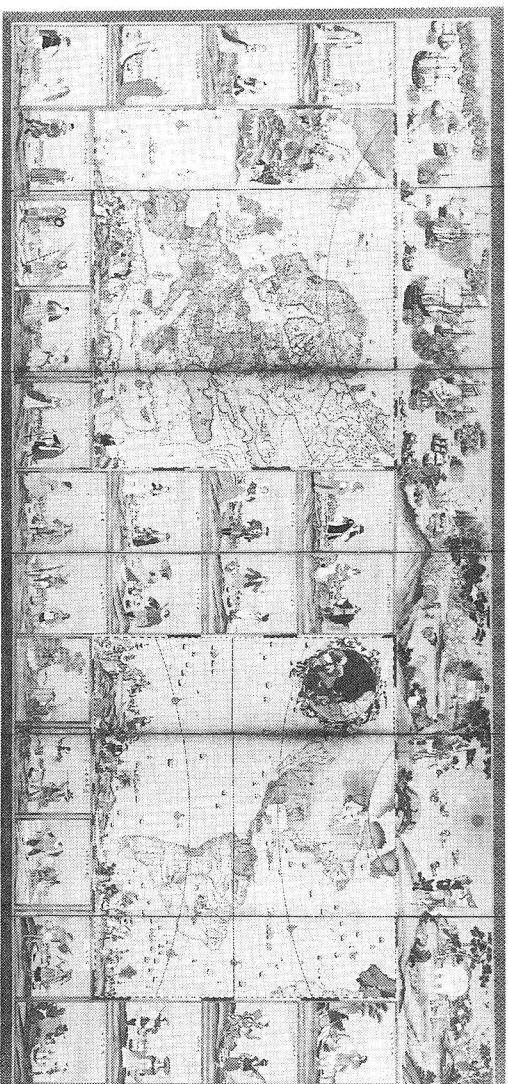
三 地図メーカーファルクと壁地図

ここで、この壁地図を作成した地図メーカーのファルク家について簡単に述べよう。出版人で彫刻師であるG・ファルクはアムステルダムに生まれたが、それを一六二六年と、たとえばバゲロウなどは書いている。^⑧しかし、彼は一七二六年に死んでいるし、結婚は一六七三年なので、これはおかしい。生没年はトゥーリーの辞書に従ってG・ファルク（一六五〇頃—一七二六年）、息子のL・ファルク（一六七五—一七五五年）としておこう。G・ファルクはA・ブローテリンクの下で勉強し、その娘と一六七三年に結婚した。一年間のロンドン滞在ののち、地図とアトラスの出版事業に関し、P・シエンクと手を組んだ。一六八七年、彼と妻と息子のレオナルドはダム広場近くのカルファー通りへ、さらに数年後、彼らは著名な地図メーカーホンディウス家がかつて住んでいた家に移った。ここで地球儀（9、12、15インチの三種の大きさ）などを売っ

たのだ。一七一〇年、息子のレオナルドは父の同業者P・シエンクの娘と結婚した。若い二人はダムの家で生活し、ファルク家とシエンク家の間の共同作業は続き、一七二六年にG・ファルクが死んだとき、彼の息子のレオナルドはその事業を引き継いだ。たぶん一七三〇年以後、レオナルドはカルファー通りの家に移った。この家はL・ファルクの 'Globenakerij'（地球儀工場）として知られ、一七六九年頃、P・シエンクJr. がこの家に住んだ。

十七世紀はオランダの「黄金期」であるわけだが、その時代の象徴として画家のレンブラントやフェルメール、オランダ東インド会社VOCなどと共に、そのVOCの公認地図作成者であったブラウア家を中心とする地図作成・出版事業があげられる。ファルク家はそのブラウア家の後を継ぐアムステルダムの地図メーカーなのである。当時のアムステルダムは世界一の情報集積地であり、世界中の新しい地図はそこで作りだされていた。中でも際立っていたのが壁地図の制作である。壁地図または壁掛け地図という言葉は 'Wall map' の訳語だが、絵画のように室内の壁に掛けて装飾品としての役割もはたす大型地図のことで、本形式を基本とするヨーロッパの地図には珍しい形態といえる。絵画芸術で飾られ、全世界どこか全宇宙さえも表現する豪華な大型壁地図は、人類史上において十七世紀のオランダ人のみが作り上げた傑作といえよう。^⑨

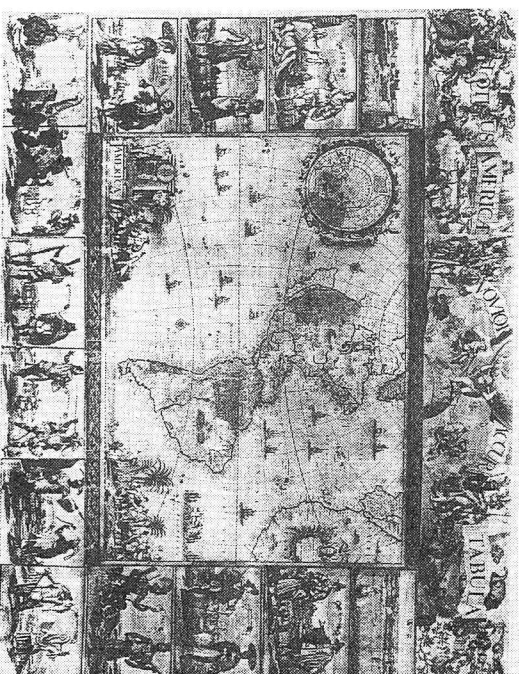
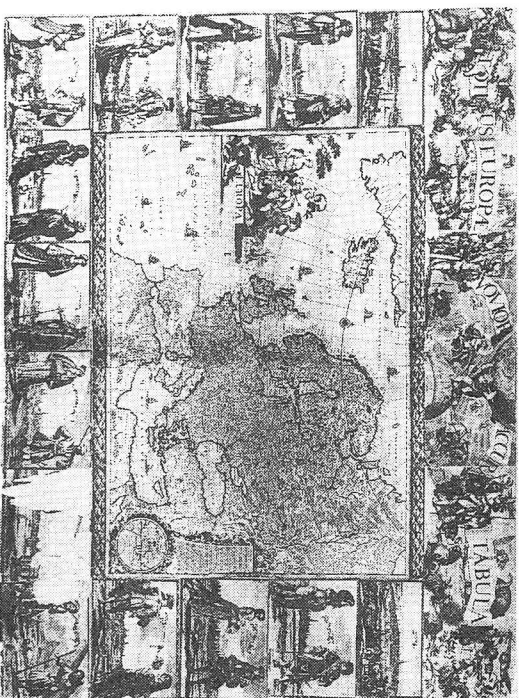
豪華な壁地図はオランダ側から日本への特別なプレゼントとして効果があったようで、ブラウ壁地図の世界的稀観品が伝来していたり、それら壁地図を手本とする日本人作世界地図の例も数多い。その壁地図の中に、今回のような地域図をセットしたものもあったのである。



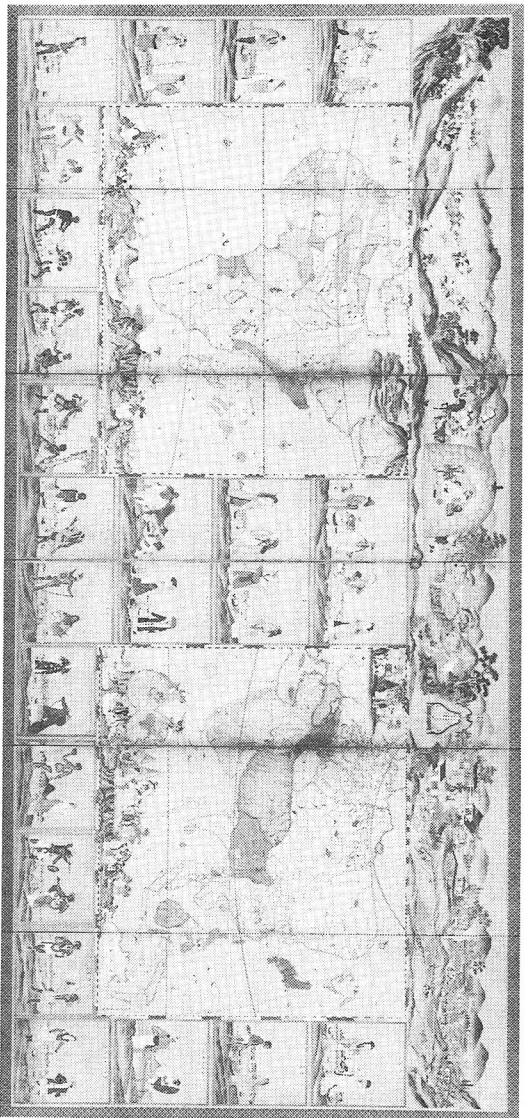
▼ 図 I-1 神戸市博屏風 (ヨーロッパ、アメリカ)
164.0×364.0cm

▶ 図 III-1 フラルク壁地図 (ヨーロッパ)
110×149cm
'SPECULUM ORBIS' より

▼ 図 III-2 フラルク壁地図 (アメリカ)
110×149cm
'SPECULUM ORBIS' より

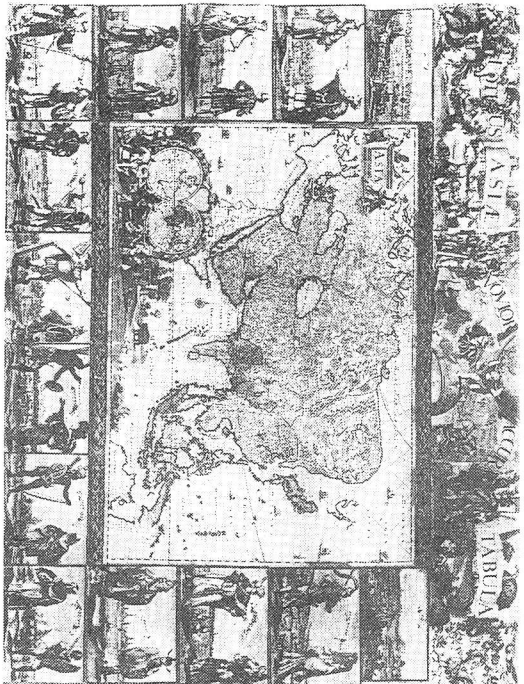


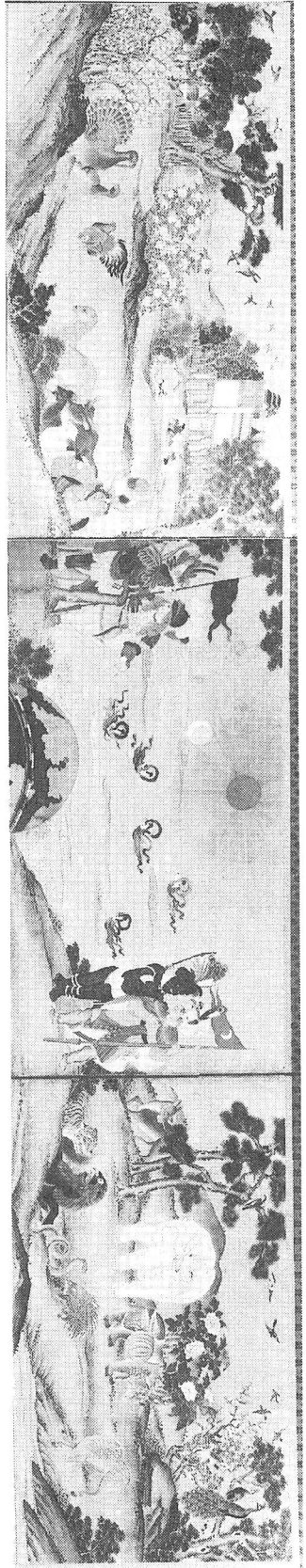
▲ 図 I-2 神戸市博屏風 (テフリカ、テジテ)
164.0×384.0cm



▲ 図 III-3 フタルク壁地図 (テジテ)
110×149cm
'SPECULUM ORBIS' より

▼ 図 II フタルクテジテ図 (1695年頃)
102.6×125.6cm
神戸市立博物館所蔵





▲図Ⅳ 神戸市博屏風のアメリカ地域図上部の装飾画部分



▲図Ⅴ フォルクワ壁地図の上部装飾画部分 'SPECULUM ORBIS' より

表

〔ファルク壁地図の人物図画〕

〔神戸市博屏風の人物図画〕

〔ファルク壁地図の図像を対応〕

<p>〔ヨーロッパ〕 ROMA (ローマ) AMSTERDAM (アムステルダム) LONDON (ロンドン) LISBONA (リスボン) VENETIA (ベネチア) CRAKOW (クラコウ) STOCKHOLM (ストックホルム) ARCHANGEL (アルハンゲル) LAPLANT (ラップラント) MADDRIT (マドリット) PARYS (パリ) WENEN (ウィーン)</p>	<p>〔ヨーロッパ〕 路越末安人 普蘭須人 部爾意傳也安人 伊須波牟野人 無須巨宇比異野人 波留曼武郊人 路安留久須笈安路人 部惠禰牟人 南蛮人 阿蘭陀人 安牟解禮以野人 保宇吾土'伊知人</p>	<p>〔ヨーロッパ〕 ローマ パリ ベネチア マドリット アルハンゲル ラップラント ストックホルム クラコウ リスボン アムステルダム ロンドン ウィーン</p>
<p>〔アメリカ〕 CANADA (カナダ) BOA VISTA (ボア ビスタ) PORTO RICO (ポルト リコ) CAPUT S. AUGUSTINI CAMPETHE (カンペテ) CALLAO DE LIMA (カラオ デ リマ) TRUGILLO (トゥルギロ) ST. ANTONIO VAR (サン アントニオ) STRAET DAVIS EN HUDSON PERU (ペルー) HAVANA PORTUS (ハバナ ポルトス) NIEW AMSTERDAM (ニューアムステルダム)</p>	<p>〔アメリカ〕 仁宇阿牟須登呂多牟人 路須之加良人 安毛世毛牟人 末土'加良宇人 都惠留宇人 良都普人 北安女利加人 禰瑞老人 咬囉吧人 発保野人 加留奈阿陀人 加奈阿陀人</p>	<p>〔アメリカ〕 ニューアムステルダム ボア ビスタ ポルト リコ カラオ デ リマ カプット アウグスチン トゥルギロ ストラト デビス エン ハドソン サン アントニオ カンペテ ハバナ ポルトス ペルー カナダ</p>
<p>〔アフリカ〕</p>	<p>〔アフリカ〕 末路駕人 母古多人 部牟仁牟人 土宇祿須人 加牟巨宇人 阿不理可阿祿異人 加不傳保宇祿宇伊都之人 (記名ナシ) 普留保宇留須人 傳留美美奈人 安留義為留須人 安傳牟人</p>	<p>〔アフリカ〕</p>
<p>〔アジア〕 CONSTANTINOPLE (コンスタンチノーブル) BATAVIA (バダヴィア) SURATTE (スラータ) KANTON (カントン) COVCHIN (コーチン) MONGUL (モンゴル) MACASSERS (マカサール) MATECALO (マテカロ) D' BERG VAN TERNATE (テルナーテ) HONAN (ホーナン) ORMUS (オルムス) SMERNE (シュメール)</p>	<p>〔アジア〕 須女留人 於留母須人 須良都亭人 加良仁須人 固留須多乎傳農保宇留人 於末具和人 (記名ナシ) 者計留留人 義為計里須人 多留奈安陀人 暹邏人 大明人</p>	<p>〔アジア〕 シュメール オルムス スラータ マテカロ コンスタンチノーブル マカサール コーチン バダヴィア テルナーテ</p>

※人物図画は各地域図とも左上から逆時計廻りで右上の図画を最後とする順番で記している。

四 両図の比較から

ここで神戸市博屏風(図Ⅰ)とファルクアジア図(図Ⅱ)、ファルク壁地図(図Ⅲ)とを見比べてみよう。比較できる部分は次の三点である。

①ファルクアジア図と神戸市博屏風のアジア地域図部分、②ファルク壁地図の人物図と神戸市博屏風の人物図、③神戸市博屏風のアメリカ地域図の上部装飾画(図Ⅳ)とファルク壁地図の上部装飾画(図Ⅴ)。

まず①であるが、絵師はファルクアジア図を敷衍している。人物の表情や熱帯樹木は原本とおりというわけにはゆかずその描写に和風化が著しいが、地図自体は原本をきっちり模写している。例外として左下の両半球世界地図の上の人物が省かれていたり、アフリカにある地球上の二地点間の距離を計る方法を説明する図は、円のみが写され文章は写されていない。その他のアフリカの部分は何も描いていないが、逆にそのことが敷衍しの証拠ともなっている。

ただこれほど模写しておきながら、日本周辺海域の西洋船の一部を、あえて中国船に描き変えている点が興味深い。この東シナ海に浮かぶ中国船の写実性はこの絵師が長崎で実際の中国船を見慣れていたこと、また日中交易を認識していたことを証拠づけないだろうか。

②については、アフリカは比較できないが表のとおり他の三地域については可能である。ヨーロッパとアメリカについては配置場所はことなるものの、その図像は全く一致する。細かなところまでの観察は不可能ながら、人物ならびにその背景にいたるまで同じとみてよい。その配列

については、装飾物である人物図画は本来、各地図ごとに印刷され組み合わされるもので、原本となったオランダ製壁地図の配列はおそらく屏風とおりなのだろう。また人物図の漢字表記も理になつていない。アジアに関しては三例を除いてファルク壁地図と一致する。不一致としてはカントン(広東)・モンゴル・ホーナン(河南)はなく、大明人、シャム人、於末具和人(?)を入れてある点である。ヨーロッパ・アメリカ図であれほどの一致を見せており、さらに前面に人物、背景にその他の風景という構図も一致していることから考えると、全く独自にこの三点が加えられたのではなく、もともとこの三者が原本にあつたと考えるほうが自然であろう。もちろん、この三者は他の人物図鑑などから意図的に差し替えられたと考えられないこともない。前述の西洋船と中国船の差し替えもそうであるし、ヨーロッパ製地図を手本にしなから日本付近は独自の改良が行われることは、わが国地図作成史上で幾つも指摘できることだからである。

③に関しては詳細な部分はともかく、全体の構図や動物・人物等の配置はほぼ一致している。主な違いを述べると、右の動物群の象であるが、原本では「ABUBA」の文字帯があつて上半身しか見えないが、屏風では全身が描かれている。しかし、その姿は仏画にでも出てきそうな白象である。また、そばに原図にはないサイがいるが、その姿は「ヨンスン動物図譜」を真似て江戸時代によく描かれた姿である。

だが何といつても目を引くのは中央部分である。天空を支える巨人アトラスとまわりの天使ならびに天空駆ける凱旋車が、「日」「月」と「天女」に変化させられている。これは他のたとえば熱帯樹木を和風にしか

描けないといったことと違って、西洋船を中国船に入れ換えるといったことと同じく「あえて」の描き変えであろう。天空の西洋文化を日本側のそれに置き換えているのだが、それが深遠な思想によっているのかそれとも単に訳もわからずの変更か、その差はそれこそ天地ではある。原図の方は全ての地域図の上部装飾はこれであるが、屏風の方は四場面別々に描き、この片隻は前述のとおりヨーロッパ的雰囲気醸している。この部分の変更で日本側主張をしているのであろうか。単なる思いつきではないと考えたいが、それを傍証するものはない。ここでは西洋製地図の受入れに際しての、一断面として記しておきたい。

五 おわりに

今回、展覧会を通じて偶然に知りえた一事例（まさにそれ以上でも以下でもない）を報告させていただいた。ヨーロッパ製地図の中でも、装飾品としての機能を持つ壁地図がわが国に与えた影響は甚大なものがあること、日本人作世界地図の作成地として「長崎」が無視しえない重要地であることが確認できた。また、日本人が手本とした西洋画の原本がこれまでは銅版画集などが想定されていたが（たとえば本屏風の人物図と同様のものが早稲田大学図書館に存在しているが、従来これらはある銅版画集から採用されたと考えられていた）、地図周囲の装飾物の影響が大きいことも判明した。取り上げた屏風は、地名国名の翻訳問題をはじめ、絵師や作成年代、人物図の同定や他の人物図との関連など、含む問題は数多い。今回、屏風は西洋製地図の良好な受入例であることが判

明したので、今後の研究材料として大いに利用価値が高まった。

展覧会を開催すると、それを見た方々から貴重な助言やさらなる関連資料を教えられ、喜んだり恥ずかしかったりと悲喜こもごもである。今回のこともそのようなことであるが、自らの館に応じた企画展を実現させることがどれほど館と学芸員の血肉になるのかをあらためて思い知らされる。このように展覧会でも、日々の資料整理の過程でも学芸員は「新たな発見」に出くわす。結局は資料が主役で学芸員は脇役であり、自らは語ることでできない個々の資料を学問体系に近づけ位置づけてやるのが学芸員である、ということを感じずにはいられない。

註

- ① 池長孟『邦彩蠻華大寶鑑』一九三三年 創元社 なお、この地図屏風の項に「あるじ」と「地図学者」の対談が入れられているが、その「地図学者」はわが国古地図研究の草分け秋岡武次郎である。
- ② 池長孟編集『市立神戸美術館収蔵 南蛮美術総目録』市立神戸美術館 一二五頁 一九五五年
- ③ 杉原たく哉「神農図の成立と展開」『斯文』一〇一号 一九九二年二月
- ④ 「ZIPANGU THE MAPPING OF JAPAN」(一九九三年) PAULUS SWAEN OLD MAPS AND PRINTS, Geldrop The Netherlands. 一四頁
- ⑤ 拙稿「世界図屏風と船」『博物館だより』四四号 神戸市立博物館 一九九三年七月、同「オランダの賜物」『栄光のオランダ絵画と日本』朝日

新聞社 一九九三年七月

⑥ Josef H. Biller: Jemniště ist eine Reise wert Kostbarkeiten holländischer Kartographie und Vedutenkunst in Böhmen, SPECULUM ORBIS 2, 1985.

なな' マ'ン'は PAULUS SWAEN を知るホルンタの古地図である。
註④参照。

⑦ Ir. C. Koeman: ATLANTES NEERLANDICI, Vol.3 一三六頁～ 一九六九年

⑧ BAGROW, L. 'DIE GESCHICHTE DER KARTOGRAPHIE', Berlin 1951.

⑨ R. V. Tooley 'TOOLEY'S DICTIONARY OF MAPMAKERS', New York 1979.

⑩ 拙稿「J・ブラウの1645/46年版世界地図について」『神戸市立博物館研究紀要』一一号 一九九四年

⑪ 前掲⑤「世界図屏風と船」